

図書館情報メディア研究科修士論文

グライスの会話の理論による
別役実のコント作品分析
ーディスコミュニケーションに着目してー

2021年03月

201921626

大野 優花

グライスの会話の理論による別役実のコント作品分析
—ディスコミュニケーションに着目して—
An Analysis of Betsuyaku's Conte Works according to Grice's
conversational theory : Focusing on Discommunication

学籍番号：201921626

氏名：大野 優花

Ono Yuka

ディスコミュニケーションに着目して、別役実のコント作品における会話をグライスの会話の理論を用いて分析することでおもしろさとディスコミュニケーションの関係を明らかにできると考えた。意思疎通ができていないこと、会話の格率を遵守していないことをディスコミュニケーションの意味とする。

別役実のコント作品から、コントの中の会話とした場合、第三者の視点から見た場合のどちらか、またはその両方に会話の格率が遵守されていないことを軸として会話を抜粋し、グライスの会話の理論を用いて分析・考察を行った。グライスは会話を効果的に伝達するために、会話をしている相手の発言の目的や方向性を踏まえて、まとを得た発言をするべきであると提唱し、そのために遵守する必要がある格率を会話の格率とした。

分析した結果、ディスコミュニケーションに着目した場合、別役実のコントの持つおもしろさは、三つの種類に分類できることが分かった。その分類は、(1) コントの中の会話とした場合においても第三者の視点から見た場合においても、会話の格率のいずれかが遵守されておらず、会話もうまく行われていない場合、(2) コントの中の会話とした場合では、格率は遵守されており、会話もうまく行われているが、第三者の視点から見た場合は、会話の含みを見ることができるところ、(3) コントの中の会話とした場合においても第三者の視点から見た場合においても、会話の格率は遵守されていないが、会話が成り立っている場合であった。そして、それぞれにおもしろさが生じており、そこにはディスコミュニケーションが大きな役割を果たしていることが明らかになった。

研究指導教員：横山 幹子

副研究指導教員：後藤 嘉宏

グライスの会話の理論による
別役実のコント作品分析
ーディスコミュニケーションに着目してー

筑波大学

図書館情報メディア研究科

2021年03月

大野 優花

目次

1.序論.....	1
1.1.はじめに.....	1
1.2.語句について.....	1
1.3.先行研究.....	1
1.4.研究目的・方法.....	3
2.グライスの会話の理論.....	4
2.1.グライス.....	4
2.2.協調の原理について.....	4
2.3.含みについて.....	5
3.分析対象.....	8
3.1.別役実について.....	8
3.2.『別役実の混沌・コント』について.....	8
4.分析.....	9
4.1.「夕焼け小焼けで」(p.5-15).....	9
4.1.1.「夕焼け小焼けで」会話①.....	9
4.1.2.「夕焼け小焼けで」会話②.....	10
4.1.3.「夕焼け小焼けで」会話③.....	10
4.2.「ソロロ・ポリン・テニカ・カバト・オスス・トンブ・ピリン・パリン」(p.17-25)	11
4.2.1.「ソロロ・ポリン・テニカ・カバト・オスス・トンブ・ピリン・パリン」会話④	11
4.3.「或る晴れた日」(p.27-36).....	12
4.3.1.「或る晴れた日」会話⑤.....	12
4.4.「混沌」(p.37-59).....	13
4.4.1.「混沌」会話⑥.....	13
4.4.2.「混沌」会話⑦.....	14

4.5. 「死体がひとつ」 (p.61-73)	14
4.5.1. 「死体がひとつ」 会話⑧	14
4.5.2. 「死体がひとつ」 会話⑨	15
4.6. 「混沌 そのつぎ」 (p.75-95)	16
4.6.1. 「混沌 そのつぎ」 会話⑩	16
4.6.2. 「混沌 そのつぎ」 会話⑪	17
4.7. 「ブランコ」 (p.97-106)	18
4.7.1. 「ブランコ」 会話⑫	18
4.7.2. 「ブランコ」 会話⑬	18
4.8. 「手術中」 (p.107-110)	19
4.9. 「身ノ上話」 (p.111-120)	19
4.9.1. 「身ノ上話」 会話⑭	19
4.10. 「狩猟時代」 (p.121-129)	20
4.10.1. 「狩猟時代」 会話⑮	21
4.11. 「もしかして」 (p.131-137)	21
4.11.1. 「もしかして」 会話⑯	21
4.11.2. 「もしかして」 会話⑰	22
4.12. 「白日夢」 (p.139-144)	23
4.12.1. 「白日夢」 会話⑱	23
4.13. 「ふなや—常田富士男とふなの対話—」 (p.145-173)	24
5. 考察	24
6. おわりに	26

参考文献

注

1.序論

1.1.はじめに

別役実 日本の不条理演劇を確立したと言われている。¹私は、不条理であることとディスコミュニケーションが大きな関係性を持っていると考えた。また、笑い話がディスコミュニケーションと関係があることを見た。²そのことから、別役実作品の中で笑い話であるコント作品を取り上げ、ディスコミュニケーションに着目して分析できると考えた。

別役実のコント作品の中の会話をディスコミュニケーションという視点に着目し、グライスの会話の理論を用いて分析し、別役実のコント作品のおもしろさとディスコミュニケーションの関係を明らかにしたい。

1.2.語句について

本論文において用いている語句のうち、意味の説明を要する語句を挙げる。その語句は、「コミュニケーション」、「ディスコミュニケーション」、「コント」の三つで、それぞれについて説明する。コミュニケーションをデジタル大辞泉は、「社会生活を営む人間が互いに意思や感情、思考を伝達し合うこと。言語・文字・身振りなどを媒介にして行われる。」³と定義している。本論文における「コミュニケーション」はデジタル大辞泉が定義する意味と同様の意味で用いる。次に、「ディスコミュニケーション」についてである。ディスコミュニケーションは和製英語であり、「意思伝達ができないこと。コミュニケーションが絶たれた状態。」⁴を指す。本論文で用いる「ディスコミュニケーション」の意味は、上記の辞書的な意味に加えて、会話の格率を遵守していないこととする。最後に「コント」はもともとフランス語で、「1 短編小説。特に機知に富み、ひねりを利かせた作品。2 笑いを誘う寸劇。」⁵と定義されている。本論文でのコントは、「2 笑いを誘う寸劇。」の意味として用いている。

1.3.先行研究

別役実に関する先行研究の多くが、別役実の作品に対する劇評や解説、分析であった。ここで取り上げる先行研究は『別役実論』⁶である。『別役実論』では、別役実が発表してきた作品（戯曲）に対する印象、共通する特徴や、何が作品に影響を与えたのかなどを論じている。別役実の作品はベケットやイヨネスコに影響を受けており、ベケットの『ゴドーを待ちながら』に登場する一本の木のように、別役実のほとんどの作品で一本の電信柱が登場する。別役実の作品は「何故言っているか」を問題として、日常性の中からリアルに非日常性を摘

出ることが作品の中心にあるのではないかと述べられている。

コントに関する主な先行研究として、『ディスコースにおける幸福な逸脱：緩叙法・ボケ/ツッコミ』⁷、『コントと笑いの関係についての考察—ラーメンズのコントを題材として—』⁸を挙げ、説明する。

一つ目の『ディスコースにおける幸福な逸脱：緩叙法・ボケ/ツッコミ』は、ディスコースについて緩叙法とボケ/ツッコミを比較しながら検討し、グライスを含む語用論の見方を一部用いて考察している。フランス語の構文における緩叙法的発話を具体例として、どのようなディスコースが展開されているのかを考察している。ディスコースからの「逸脱」とボケ/ツッコミの例を比較し、ディスコースが必ずしも「前進」しなければならないのかについて検討している。その結果、ボケ/ツッコミのような「逸脱」が「おもしろさ」を生み出すこともあり、それは「幸福な」逸脱と言えらるゝとしている。

二つ目の『コントと笑いの関係についての考察』は、お笑いコンビであるラーメンズの単独公演のコントを対象とし、コントの核となる要素などを調査・分析し、ラーメンズの作品の魅力を作り出しているものを明らかにしている。それぞれのコントに核となっている要素が一つあり、それぞれが担っている役割について分析している。また、それらの要素が観客へもたらす影響についても考察している。コントの核となる要素がラーメンズの魅力や観客に与える印象に影響していることを結論付けている。

グライスをを用いた作品分析についての主な先行研究を挙げ、それらについて説明する。主な先行研究として、『ことば遊びは何を伝えるか? : ヤーコブソンの〈詩的機能〉とグライスの会話理論を媒介として』⁹、『ポール・グライスから遠く離れて—「協調の原理」で読むシェイクスピア作品の会話—』¹⁰が挙げられる。

一つ目の『ことば遊びは何を伝えるか?』は「ことば遊び」のコミュニケーション上の機能を、ヤーコブソンの詩的機能とグライスの会話の理論を用いて論じている。ヤーコブソンの言語機能論の中で言語的なコミュニケーションに不可欠な要因が六つあると述べられおり、その中の詩的機能に注目している。詩的機能から「詩的言語」と「病的言語」を見れば、二つは似通っており、それらを分けるのは〈文脈〉の質である。枠やテーマを〈大文脈〉、部分的なものを〈小文脈〉としている。「ことば遊び」には三つの型がある。「駄洒落」や「むだ口」のような洒落一般を指す即興型、「アクロスティック」「アナグラム」「回文」を指す技巧型、「しりとり」「なぞかけ」のようなゲーム型である。それぞれの具体例等を〈文脈〉の観点から見ると、小文脈の脱線、見かけの大文脈、事後的にのみ成立する大文脈な

どの特徴が見えた。これらの特徴がコミュニケーション論的にどのような機能を持つのかをグライスの協調の原理を用いて見ている。「ことば遊び」は、何らかの会話の格率を遵守しておらず、また、「含み」を見出せるケースはないとしている。

二つ目の『ポール・グライスから遠く離れて―「協調の原理」で読むシェイクスピア作品の会話―』において、論文の概要と本研究の参考とした点について説明する。この論文は、シェイクスピア作品から、協調の原理の四つの格率を遵守していない会話を例として取り上げ、現実の会話と想定した場合と文学作品の中の会話と捉えた場合とそれぞれ考察を行っている。現実の会話と想定した場合より文学作品の中の会話と捉えた場合の方が、得られる情報量が多くなり、含みの推測もできるとし、「協調の原理」から離れた言葉を愉しむことができるとしている。会話の捉え方を二つに分けて考察することで、もたらす影響に差が出ると結論付けている。

1.4.研究目的・方法

前節で見たように、コント作品をディスコミュニケーションに着目して分析したものはなく、また分析方法にグライスの会話の理論を用いられたものは見られなかった。このことから本研究では、別役実のコント作品をディスコミュニケーションに着目し、グライスの会話の理論を用いて分析し、別役実のコント作品のおもしろさについて考察することを目的とする。

本研究の研究方法としては、グライスの会話の理論を用いる。グライスは日常言語学派の哲学者であり、オースティンの弟子に当たる人物である。オースティンは行為も発話であるとした。自身の卒業研究では、江戸笑話集をディスコミュニケーションに着目して分析した。しかし、オースティンは行為を発話とし、その行為を一つに決めていたため、行為がひとつに決まらないような曖昧な例はオースティンの言語行為論では分析できないことが分かった。そこで、依頼や約束のように行為を特定しなくても、発話を分析できる必要があると考え、グライスを選択した。グライスは会話全体の中で発話がもつ意味に着目しているため、行為を限定しなくても発話を分析できると考えた。

ディスコミュニケーションの例として、別役実のコント作品から会話を抜粋し、その会話をグライスの会話の原理を用いて分析する。具体的には、『ポール・グライスから遠く離れて―「協調の原理」で読むシェイクスピア作品の会話―』の分析方法を参考にし、分析対象であるコントの中の会話を現実の会話と想定した場合（以下、コントの中の会話とした場

合)と作品の中の会話と捉えた場合(以下、第三者の視点から見た場合)とに分けて分析・考察する。

2. グライスの会話の理論

2.1. グライス¹¹¹²

ポール・グライスは、1950年代頃から活躍した日常言語学派の哲学者である。日常言語学派とは、日常言語を中心に分析し、その哲学的課題の解明をめざす哲学の一派のことで、イギリスのオックスフォードを中心に活動した。グライスは日常言語学派の中心的人物でもあったJ.L.オースティンを師事し、日常言語学派の中核を担っていた。日常言語に対するオースティンの見方に基本的に賛同しながらも、根本的な不満からオースティンとは一線を画した独自の観点から理論を提唱した。その独自の理論とは、話し手が言外に含みとすることから言葉がもつ意味や含みを区別し説明する理論である。これを会話の理論という。本研究ではこの会話の理論を用いて分析を行った。次の節では会話の理論について詳しく説明する。

2.2. 協調の原理について¹³

グライスは会話を効果的に伝達するために、会話をしている相手の発言の目的や方向性を踏まえて、まとを得た発言をするべきであると提唱する。これを協調の原理と呼ぶ。会話の中でこの協調の原理に沿うような結果を生じさせるためには従わなければならない格率があるとし、それは四つの異なるカテゴリーに分類でき、その四つのカテゴリーの下にそれぞれ上位の格率と下位の格率があるとする。それらの格率のことを会話の格率とし、四つのカテゴリーを「量」、「質」、「関係」、「様態」と呼ぶ。それぞれのカテゴリーについて説明する。まず、「量」のカテゴリーは、提供されるべき情報の量に関係している。これに属している下位格率が以下の二つである。

- 1、(言葉のやりとりの当面の目的のための) 要求に見合うだけの情報を与えるような発言を行いなさい。
- 2、要求されている以上の情報を与えるような発言を行ってはならない。¹⁴

次に「質」のカテゴリーについては、「真なる発言を行うようにしなさい」(ポール・グライ

ス p38) という上位格率があり、その下に二つの下位格率が属している。

- 1、偽だと思うことを言ってはならない。
- 2、十分な証拠のないことを言ってはならない。¹⁵

三つ目は「関係」のカテゴリーである。これには一つの上位格率にしかなく、「関連性のあることを言いなさい」(ポール・グライス p38) である。最後は、「様態」のカテゴリーである。このカテゴリーには「わかりやすい言い方をしなさい」(ポール・グライス p38) という上位格率があり、その下には四つの下位格率が属している。

- 1、曖昧な言い方をしてはならない。
- 2、多義的な言い方をしてはならない。
- 3、簡潔な言い方をしなさい (余計な言葉を使ってはならない)。
- 4、整然とした言い方をしなさい。¹⁶

四つのカテゴリーのそれぞれの格率は、「質」のカテゴリーに属する「1、偽だと思うことを言ってはならない」という格率が満たされていることを前提として機能する。

2.3.含みについて

グライスは、「含み」の概念についても言及している。¹⁷「含み」の中でもいくつかの含みは慣習的であり、使用された語の慣習的意味が発言自体の意味の決定をする助けになり、また、その発言の含みとされていることを決定する。一方で、非慣習的な含みは、協調の原理と本質的なつながりを持つとされ、その一部のことを「会話の含み」と呼ぶ。

協調の原理や格率と会話の含みのつながりは、会話をする人が様々な方法で格率から逸脱する事例を考えることで明らかにできる。逸脱の仕方にはいくつかの種類に分けられる。その種類とは、侵害 (violate), 拒否 (opt out), 衝突 (clash), 無視する (flout) の四つである。侵害とは、会話の格率を遵守していないことを意味する。拒否とは、話し手が協調の原理を満たすために求められる格率を意図的に遵守していないことである。衝突とは、ある格率を遵守しようとする、他の格率を遵守できないことである。例えば、質の格率を遵守しないことには、量の格率を遵守した発言ができないかもしれないということである。最

後に、無視するとは、意図的に分かりやすく格率を遵守しないことである。話し手がこれら四つすべてに当てはまらないとした場合、話し手が言ったとおりの事柄を言うことと話し手が協調の原理を遵守しているという仮定がどのように調和するのか、という疑問を聞き手がもつ。このような状況が会話の含みを生じさせる典型的な状況である。このことからグライスが会話の含みという概念を以下のように特徴づけている。¹⁸

ある人が p ということを言う（あるいは言う素振りを示す）ことで q ということを含みとしたとすると、その人が q ということを会話の含みとしたと言えるのは次の[条件が充たされている]場合である。すなわち、(1) その人は会話の格率を、あるいは少なくとも協調の原理を、遵守しているものと推定されること、(2) その人の p という発言またはその素振り（あるいはそのどちらかが行われているということ）を右の推定と両立させるためには、その人が q ということに気づいている、あるいは q と考えている、と仮定する必要があること、そして (3) 聞き手には (2) で触れた仮定の必要性を割り出す能力、または直観的に把握する能力がある、と話し手が考えていることである。

次に会話の含みの例を三つのグループに分けて挙げている。¹⁹

一つ目のグループは、四つのどの格率も侵害されていない、もしくは、明白ではない場合の例である。以下に具体例を示す。

- (1) A: ガソリンを切らしてしまった。
B: すぐそこにガソリンスタンドがある。
- (2) A: スミスにはこのところ女友達がいらないようだ。
B: 彼は近頃ひんぱんにニューヨークに出掛けている。

(1) の例については、A の発言と B の発言にわかりやすく言外のつながりがあることが見える。もしも、B がガソリンスタンドの有無のみを考えて発言しているのであれば、関係の格率を遵守していないことになるが、ガソリンスタンドが営業中であることを含みとして考えると、すべての格率を遵守している。(2) の例は、B の発言は、ニューヨークにスミスの女友達がいることを含みとしている。どちらの例からも見られるように、格率

が遵守されていると仮定すると、話し手が一定の事柄を含みとしていることを仮定しなければならない。

二つ目のグループは、ある格率が侵害されているが、その理由が他の格率と衝突していると想定することで説明できるような場合の例である。以下に具体例を示す。

A は B と一緒に、フランスで休暇を過ごす旅の計画を立てている。二人とも、A が、友人 C に会いたがっていることを知っている。

(3) A : C はどこに住んでいるんだ。

B : 南フランスのどこかだ。

B の発言は、A が求めている情報を満たすには情報量が少なすぎるため、量の第一格率である「要求に見合うだけの情報を与えるような発言を行いなさい」ということが遵守されていない。B は格率を拒否する理由がない。このことから、量の格率を遵守できなかった理由は、A の要求を満たすぐらいの情報量を発言すれば、質の第二格率である「十分な証拠のないことを言うてはならない」を違反してしまうことを B が分かっていたからである。この B の発言には、C が住んでいる具体的な場所を知らないことが含みとされている。

三つ目のグループは、格率が利用されている場合、つまり会話の含みを入れる目的のために、ある格率を無視する場合の例である。

まず、量の第一格率が無視された例として、「戦争は戦争だ」というような道後反復の発言が挙げられる。このような発言がもつ情報量はほとんどなく、量の格率を著しく違反している。会話の中で使用されたとき、含みとされた事柄においては、一定の情報を持っていると言えるが、それは聞き手が含みとされた事柄を同定できるかどうかにかかっている。

次に質の第一格率が無視される例はいくつか存在する。一つ目は皮肉である。例えば、これまで A と親しくしていた B が、A の秘密を他人に漏らした。そのことを A と聞き手は知っているという状況で、A が「B はいい友達だ」と言う。聞き手にとって、A が B のことをそう思っていない事は明白であり、聞き手にとって明白であることを A は理解している。二つ目は、隠喩である。「あなたは私のコーヒーの中のクリームだ」という例を見ると、発言された事柄のみを考えると明らかに偽である発言である。話し手は、発言の中で言及したものと聞き手との間に類似点を持つような特徴を聞き手に帰属させようとしていると考えることができる。話し手にとって、コーヒーの中のクリームが誇りと楽しみを象徴するもの

であるとしていて、聞き手がそれを理解していることで成り立っている。三つ目は緩叙法と誇張法である。誇張法の例としては、「いい娘はみんな船乗りが好きだ」である。発言が示している事柄は、確かではなく偽であるが、発言は含む事柄を聞き手が理解していることで、そう発言するくらいになにか出来事などがあつたのではないかと推測することができ、発言を成り立たせることができる。

以上のように会話の含みには様々な場合が存在する。会話の含みが存在することは直観的に把握できたとしても、論証と置き換えることができなければならない。それができなければ、含みが存在しても会話の含みとはされず、慣習的な含みになるからである。グライスは上記のような会話の含みを「特殊的〔文脈依存的〕な会話の含み」と呼ぶ。一方で、「一般的〔文脈独立的〕な会話の含み」の事例も存在する。この会話の含みは、発話の中である形式の語を使うと、その発話にはこの含みが付随する、と言える場合がある。

3.分析対象

3.1.別役実について²⁰

別役実は1960年代から活躍した日本の劇作家で、ベケットに影響を受け、日本の不条理演劇を確立した。作品としては『マッチ売りの少女』や『赤い鳥のいる風景』などの戯曲を多く発表し、その他には小説、エッセイ、コント、評論がある。『マッチ売りの少女』、『赤い鳥のいる風景』で岸田国土戯曲賞を受賞している。別役実はコントに関して、コントのように笑いを作り出すため、また、コントを成立させるための典型的状況というものがあると述べている。「コント種」と呼ばれるものがあり、それは戯曲を作るものではなく、「コントにしかならない材料」であるとする一方で、「まともな戯曲に仕立てるあげることが出来る」可能性があると述べている。

3.2.『別役実の混沌・コント』について

分析対象は、別役実のコント作品集である『別役実の混沌・コント』とした。選考した理由は、現代に近い会話である、もともと日本語で書かれた作品である、ディスコミュニケーションが多く含まれると考えられるからである。分析対象として抜粋した会話は、コントの中の会話とした場合と第三者の視点から見た場合のどちらか、または、そのどちらもの場合において、ディスコミュニケーションが起こっているかに着目して抜粋した。

4.分析

別役実のコント集『別役実の混沌・コント』²¹の各コントについての概要と分析を行った会話の抜粋および分析結果を示していく。各コントを記述する順番は著書に書かれている順番に準じて記述し、コントの概要はコント内容を参照し、私がまとめたものである。コントの題名は「題名」(ページ数)を用いて示し、また分析する会話については、「題名」会話①～⑱で示す。

4.1.「夕焼け小焼けで」(p.5-15)

概要：

男1がユーヤケ、コヤケデと歌い出すと、空が夕焼けに変わり日が暮れていく。ヤーマノ、オテラノ、カネガと歌うと鐘が鳴る。男1が歌う歌詞に呼応して状況が変わっていく。オーテテ、ツナイデと歌ったことで、手を繋ぐために男2が現れ、男1と手を繋ぐか否かの言い争いをする。言い争いの末、男1は男2を殺してしまい、現れた男3(巡査)に連れていかれる。

4.1.1.「夕焼け小焼けで」会話①

会話抜粋：

p.9-

男1 何を言ってるんだ、お前は？誰がお前のうちなんかへ行くって言った？

男2 だってそうなんでしょう、オーテテ、ツナイデ、ミナカエロ。

男1 だからそれは歌だって言ってるだろうが。

男2 いいです。じゃ、ここで、ジャンケンポンしましょう。①

男1 何だ、ジャンケンポンて？

—中略—

男1 ジャンケンしてどうするんだ？

男2 負けた方が手えつなぐんです。②

分析：

コントの中の会話とした場合、下線部①は男2の発言は関係の格率を遵守していないと考えられる。男1からすると、下線部①の直前の発言と関係のない発言であり、男1は男2の発言の意図が分からないまま会話が進んでいく。

第三者から会話を見た場合、下線部①の発言は、コントの中の会話とした場合と同様に、

関係の格率を遵守していないと考えられる。

4.1.2. 「夕焼け小焼けで」 会話②

会話抜粋：

p.9-

男1 何を言ってるんだ、お前は？誰がお前のうちなんかへ行くって言った？

男2 だってそうなんでしょう、オーテテ、ツナイデ、ミナカエロ。

男1 だからそれは歌だって言ってるだろうが。

男2 いいです。じゃ、ここで、ジャンケンポンしましょう。①

男1 何だ、ジャンケンポンて？

—中略—

男1 ジャンケンしてどうするんだ？

男2 負けた方が手えつなぐんです。②

分析：

下線部②について、コントの中の会話とした場合、下線部②は会話の格率は遵守されているため、会話がうまく行われている。

第三者の視点から見た場合、男1と男2の持つ世界の前提が異なっていると推測できる。男2は手をつないで帰ることは決定事項であり、歌った歌詞の通りに事が進むことを当たり前であるとしているように捉えることができる。しかし、男1の持っている前提知識では、歌詞通りに事が進むことはおかしいことであり、手をつないで帰ることを当たり前でないとしている。

4.1.3. 「夕焼け小焼けで」 会話③

会話抜粋：

p.14 何度もジャンケンをして全部、同じものが出る。

男1 呪われている。

男2 単なる偶然ですよ。こういうことだってないわけじゃないでしょう。この次は大丈夫ですよ。そういうもんなんです、この世の中ってのは③。

二人 ジャン、ケン、ポン。

同じものが出る。男1ワッと行って男2に飛びかかり、男2の首を締める。……

分析：

下線部③について、コントの中の会話とした場合、会話の格率は遵守されているため、会話はうまく行われている。

第三者から会話を見た場合、会話の格率は遵守され、会話はうまく行われていると思われる。しかし、下線部③「この世の中ってのは。」が含みとしていることに対して、男1と男2が異なる知識を持っていることが分かる。そのため、実は、会話がうまく行われていないと考えることができる。

4.2. 「ソロロ・ポリン・テニカ・カバト・オスス・トンブ・ピリン・パリン」 (p.17-25)

概要：

男1が「ソロロ・ポリン・テニカ・カバト・オスス・トンブ・ピリン・パリン」と思い出しながら手足の動作を入れてつぶやいている。そこへ男2がやってきて男1の間違いを指摘し、正しい動きをやって見せるが、男1の意見と食い違ってけんかになり、男2は男1を殺してしまう。そこへ男3が現れて、男2の間違いを指摘するが、その指摘により逆上した男2に殺される。通りがかった男4に男2は話しかけるが無視され、男2は取り残される。

4.2.1. 「ソロロ・ポリン・テニカ・カバト・オスス・トンブ・ピリン・パリン」会話④

会話抜粋：

男1が思い出しながら、手と足の動作を入れてソロロ・ポリン・テニカ・カバト・オスス・トンブ・ピリン・パリンをしている。そこへ男2が現れ、男1の動作をじっと見つめる、という場面に続く会話である。

p.19-20

男2 何だい……？

男1 いや、だからね（と、動作入りで繰り返してみせ）ソロロ・ポリン・テニカ・カバト、と、こうくるとだなあ、どうしても、オスス・トンブ・ピリン・パリンと……。

男2 馬鹿。

男1 え……？

男2 え、じゃないよ。馬鹿。（動作を入れて、丁寧に）オスス・トンブ・ピリン・パリン……。

男1 わかってんだよ。そんなことは。でもそれは、ソロロ・ポリン・テニカ・カバト、と、こう来た場合のことだろう……？でも、俺が今やってんのは、ソロロ・ポリン・テニカ・カバト、と……。

分析：

このコントでは、会話の中に手足の動作があり、その動作が中心となって会話が進んでいる。身振り手振りのような非言語コミュニケーションのため、コントの中の会話とした場合と第三者からの会話とした場合のどちらも言語だけに注目している今回のような場合は分析ができないと考えられる。発話が行为中心に行われている場合の分析は、グライスでは分析できないが、発展した方法で分析できるのではないかと考える。

4.3. 「或る晴れた日」(p.27-36)

概要：

女1がベンチに座っていた男1に自分の夫の殺しを突然持ちかける。謝礼を目当てに男1はすぐ引き受けようとする。しかし、女1は血も涙もなく、あっさり殺そうとする男1の態度から、殺しの依頼をためらい始める。なんとかして殺しの依頼を受けようとする男1となんとかして殺しの依頼を取り下げたい女1とのやり取りが最後まで続く。

4.3.1. 「或る晴れた日」会話⑤

会話抜粋：

p.35 上手より、巡查姿の男2、現れる。

男2 どうしました……？

女1 何でもないんですよ。この人にうちの主人を殺してくれって頼んだら、やるって言うんです……。

男2 なら、いいんじゃないですか……？①

男1 でもこの人は、駄目だって言うんですよ……。

分析：

下線部①について、コントの中の会話とした場合、会話の格率はすべて遵守されているため、会話はうまく行われている。

第三者から会話を見た場合は、女1に対する返答としてはうまくいっているが、巡查という立場を考えると、下線部①の発言は立場とのずれが生じているように思われる。これは会話の格率を遵守しているかどうかで考えることは難しい。巡查の役割に含みとされている背景知識が、コントの中と現実とで差異が生じているため面白みが生まれていると考えられる。

4.4. 「混沌」(p.37-59)

概要：

女1女2男1の住む家の中および周辺が舞台である。男1が出かけるため外に出たとき電話中の少年1が現れる。少年1は電話に男1がこっちを見ていると告げ、それを聞いていた男1は少年に話しかける。少年1は男1の問いかけに一切答えようとせず、ずっと電話に向かって男1の問いかけを繰り返すように話しかけている。怒った男1を見て少年1は逃げる。場面が変わり、家の中になる。女1がかかってくる無言電話に出ている間に、少年2が家の中に入ってくる。少年2はタケシをこの家で待たせてほしいと言うが、女1はタケシという人物を知らない。少年2とタケシとの関係性を女1は聞くが、要領を得ないまま会話が進んでいく。結局、タケシが誰なのかも少年2とタケシとの関係性も全くタケシという人物を知らない人たちの住む家でタケシを待つ理由もわからず終わる。

4.4.1. 「混沌」会話⑥

会話抜粋：

p.45

女1 いくつくらいの子……？

少年2 知らないんです……。

女1 知らないって、あなたのお友達じゃないの……？

少年2 友達になれって言われてるんですけど、僕はいやなんです……。

女1 何だかわかりませんがね、ともかくここにはいないのよ、タケシなんて子は、この近所にもね……。ですから、帰ってちょうだい……。

少年2 駄目なんです。友達にならないにしても、会うだけは会って。言われてるんですから……。会っていやならいやでいいけども、会わずにいやなんて言うなって……。

分析：

コントの中の会話とした場合、量の格率が遵守されていないと考えられる。女1はタケシについての情報を求めているが、少年2はタケシについて何も知らず、友達になれと言われていたという情報しか発言していない。女1が求める情報の量に見合った量ではないため遵守されていないと考えられるが、会話はうまく行われている。

第三者の視点から見た場合、量の格率が遵守されていない。少年2はタケシを待っていると言っているが、タケシがどのような子であるのかを知らず、女1の問いかけに対して十分な量の情報を与えていない。しかし、女1がタケシの情報をあまり重要視していないため、

量の格率が遵守されていない場合でも、会話が成り立っていると考えられる。

4.4.2. 「混沌」 会話⑦

会話抜粋：

p.49

女2 ……。あなたヨシオさん……？

少年2 カズオです……。

女2 ああ、ヨシオさんのオトモダチの……？

少年2 じゃないと思いますけど、僕、ヨシオって人、知りませんから……。タケシ君を待っているんです……。

女2 ああ、タケシさん……。そのタケシさんていうのがヨシオさんのオトモダチね……。

少年2 そうなんですか……？

女2 そうだと思いますよ。

分析：

コントの中の会話とした場合、質の格率である「十分な証拠のないことを言っはならない」ことが遵守されていない可能性がある。しかし、少年2が下線部の発言が質の格率が遵守されていないことを想定していないため、会話がうまく行われている。

第三者の視点から見た場合も、質の格率である「十分な証拠のないことを言っはならない」ことが遵守されていないと考えられる。この場合、下線部が十分な証拠のないことで発言であることは分かっている。偽であると判断することはできないため、複雑な人間関係を想像する必要があると思われる。

4.5. 「死体がひとつ」 (p.61-73)

概要：

落ちていた死体を拾ってきた女2と死体処理係の女1との会話である。死体をどう処理するのかを話している。女1と女2が話している所に巡查姿の男1が現れる。男1は女1と女2の死体への態度や扱いに対して苦言を呈するが、女1が死体処理係であると告げると納得した様子で、死体に関する手続きを済ませて去っていく。

4.5.1. 「死体がひとつ」 会話⑧

会話抜粋：

p.63-64

女2 そうなんです。ですから、私、どうしようかと思って……。

女1 どうしようかって……？

女2 だって、私。病院へ行かなくちゃいけないんです……。死体ですからね、あんなところに放っとくわけにもいかないと思って持ってきましたけど……。 (腕時計を身て) 面会時間は、八時までなんです……。①

もちろん、どうしてもお見舞いしなくちゃいけないって人じゃないんですよ。売り場が違いますし……。ですから、むこうは食料品売場で、私の方は家庭用品で、それほどおつきあいがあったってわけじゃないんですから……。でも、昨日イチカワさんに聞きましたら、イチカワさんっていうのは、家庭用品の主任なんですけどね、まだお見舞いに行っていないのは、私だけだって言いますでしょう……。？もちろん、イチカワさんがどうしてそんなこと言ったかという……。②

女1 いいです、行って下さい……。

女2 行ってって……？

女1 ですから、病院へ、お見舞いに……。

分析：

下線部①②について、コントの中の会話とした場合、女1の「どうしようかって……？」という問いに対する返答として、必要以上の情報を与えている。これは量の格率を遵守していないと考えられる。女1が求めている返答は下線部①のみで満たされており、下線部②は必要のない返答である。下線部②の返答からその場を早く立ち去りたいようにも、病院へ行きたくないようにも取れる。

第三者の視点から見た場合、量の格率を遵守していないと考えられる。必要以上の情報があることで、「情報が多くて関係がないことを話している行為」が混乱ではなく、面白みを出していると理解できる。逆にこの返答の情報量が少なすぎると、必要な情報を引き出すために質問を重ねなければならず、会話が冗長になり、テンポが悪く見えるのではないかと考えられる。

4.5.2. 「死体がひとつ」会話⑨

会話抜粋：

p.71 男1は死体の扱いについて女1に苦言を呈している。

男1 係って……？

女1 (木札を示し) 書いてあるでしょう、死体処理係って……。

男1 ここが……？

女2 そうよ……。それじゃなくちゃ、私、こんなところに置いてかないわ……。

やや、間……。男1、きつねが落ちる。

女1 何か、問題……？

男1 いやいや、それを先に言って下さいよ……。いやだなあ……。あなたが死体処理係で、だからあなたがこれをあれしたんだとすれば、それはもう、普通のあれなんですから……。

③

分析：

下線部③について、コントの中の会話とした場合と第三者から会話を見た場合とで「死体処理係」がもつ意味が大きく異なる。コントの中では、「死体処理係」と言われれば、死体を持っていることは当たり前であると受け入れられている。

しかし、第三者からの視点から見ると、「死体処理係」であっても死体を持っていることや死体を運んでいることは受け入れられることではない。「死体処理係」という発言がもつ含みの差が大きいと考えられる。

4.6. 「混沌 そのつぎ」(p.75-95)

概要：

「混沌」(p.37-59)のその後に当たる話である。前回は舞台となっていた女1女2少年2がいる家に男1と少女1(ミヨちゃん)が合流している。少女1は意味不明な発言や行動をしており、男1の疑問や発言には少年2が答えて会話が進んでいる。少年2はこの家のためになることとして女1の代わりに女2を殺そうとしていると言い出す。少女1に止められる。その後、少女1は男1に女がいると話し始める。そのことについて会話が続く中、男1はトイレへ向かい、その後を追って少年2は男1を殺してしまう。様子を見に行った女2も同様に殺される。巡査姿の男3が現れ事情を聞いている間に、四、五人の少年たちが突然現れ、家の物をほとんど持って行き、女1と男2を残したまま終わる。

4.6.1. 「混沌 そのつぎ」会話⑩

会話抜粋：

p.84

女2 食べさせてくれないんだよ、ヨシオさん、毒が入ってるって言ってね……。

男1 毒が入ってる……？

少年2 ヨシオさんじゃなくて僕ですよ、毒が入ってるかもしれない①って言ったのは……。その前に、この小母さん、お婆ちゃんが毎日食べるばかり言ってるって言ってたもので……。

女1 私、言ってませんよ、そんなこと……。

分析：

下線部①について、コントの中の会話とした場合も第三者の視点から見た場合も、「十分な証拠のないことを言ってはならない」という質の二つ目の格率を遵守していない。毒が入っていることは少年2の想像である。コントの中では、この発言は男1、女1、女2に混乱を招いている。

第三者の視点では、想像の発言であるが、それが真でも偽でも物語が話の展開を予想できないため、何が起こるか分からないようなかいわになっていると考えられる。

下線部②について、下線部①と同様にどちらの場合でも、質の格率を遵守していないと考えられる。その後の女1の「言ってませんよ、そんなこと」という発言を真偽どちらと捉えるかによって下線部②の解釈は変化すると考えられる。

4.6.2.「混沌 そのつぎ」会話⑪

会話抜粋：

p.88

少年2 殺してって、(男1を示して)これを……？

少女1 そう……。

男1 馬鹿なことを言うんじゃない……。

少年2 でも、何故……？

少女1 女がいるんだよ……。今夜も、その女に会いに行ってたのさ……。みんな知ってる……。そのお婆ちゃんも、この人(女1)もね……。③

分析：

下線部③について、コントの中の会話とした場合、関係の格率を遵守していない。下線部③は少女1には関係のないことであり、殺す理由にならないため、少年2の発言の返答として関係の格率が遵守されておらず、会話がうまく行われていないと考えられる。

第三者の視点から見た場合、コントの中の会話とした場合と同様、関係の格率を遵守して

いないと考えられる。

4.7. 「ブランコ」 (p97-106)

概要：

男がブランコに乗り始める。乳母車を押した女が現れ、ブランコの順番を待つかのように立ち止まる。女は男に、そのブランコはあなたのものかと尋ねると男は否定する。すると、女はそのブランコは自分が朝一番に順番を取ったブランコだと言い、順番を取らずブランコに乗った男を責める。男は罰金を支払って解決しようとするが、女は和解を受け入れず、最後謎のセリフを残して去っていく。

4.7.1. 「ブランコ」 会話⑫

会話抜粋：

p.99-100

男 わかりました。すみません、どうぞお使い下さい。てっきり空いていると思ったもんですから……。

女 番号札を持っていますか……？①

男 いえ、何ですか、その、番号札と言うのは……？②

女 これです（と、ハンドバッグから出して見せ）千八百十二番てありますでしょう。これが今日の番号なんです。つまり、これより若いと、私たちより先に乗れますし、大きいと、私たちの後になります……。失礼ですけど、あなたのは……？

分析：

下線部①②の会話から、そのブランコに乗るためには番号札が必要であるという規則を、女は知っていて守るべきであると思っているが、男は知らなかったことが分かる。番号札を持っているかという発言に何番であるのかという意味が含まれていると考えられる。コントの中では、女と男でそのブランコに乗るための規則という前提知識が異なるため、下線部①に含まれる意図を受け取ることができていない。第三者の視点では、含みがあることを分かった上で男の発言やその後の会話を見ることができると考えられる。

4.7.2. 「ブランコ」 会話⑬

会話抜粋：

p.104-

女 三万円でどうだって言うのは、そのためのお金だと思いましたがけど……。

男 やめて下さい……。

女 (上着を脱いで、それを地面にこすりつけて) どうしてここに土がついたか、わかります？あなたが私に足払いをくらわして、倒れた私を引きずったからですよ。③

男 ちょっと待って下さい。何が何だかよくわからないんですけどね、今、三万円払えって言ってるんですか……？

分析：

下線部③について、コントの中の会話とした場合も第三者の視点から見た場合も質の格率を遵守していない発言である。この質を遵守していない発言によって男は混乱していることが続きの発言から分かる。

4.8. 「手術中」(p.107-110)

概要：

手術台に横になっている男1は看護婦に先生はどうしたのかと聞くと、来客中で席を外していると言う。手術の最中であることや先生は奥さんと離婚協議をしていることなどを話していると、奥で悲鳴が聞こえる。先生が奥さんに刺されたという。

分析：

とても短いコントである。男1と看護婦の発言は、会話の格率を遵守していると考えられるため、ディスコミュニケーションの視点では分析することができなかった。

4.9. 「身ノ上話」(p.111-120)

概要：

男1は通りすがりの男2の身ノ上話を聞いてほしいと言う。はじめ、男2は断るが、男1がしつこくせがむため聞くことにする。生まれたところから話そうとするが、何も起こらないフツーな出来事は飛ばすように言われ、再び話し始める。男1はフツターの人生であることをフツーじゃないのか、なぜこんなにフツーなのかということを知りたいだけだと言って、椅子に縛り付けた男2を放ったまま去っていく。

4.9.1. 「身ノ上話」会話⑭

会話抜粋：

p.117

男2 四十二の身ノ上話を生まれた時から始められちゃかなわないよ……。生まれた時に何かあったのか……？

男1 ありませんよ……。

男2 フツーなんだな……？

男1 フツーです……。

男2 フツーはとぼせ……。

男1 フツーに生まれまして、フツーに育ちまして、フツーに小学校に入学しまして、フツーに小学一年生となりまして、フツーに小学二年生となりまして……。①

分析：

下線部①について、コントの中の会話とした場合、量と様態の格率を遵守していないと考えられる。男2のフツーはとぼせという要求に対して、生まれから順番に説明しているのは、要求以上の情報を与えている。また、男2の発言は要領を得た発言を求めていると考えられることから、発言が冗長である下線部①は、様態の「簡潔な言い方をしなさい」という格率を遵守していないと考えられる。

第三者の視点から見た場合も同様に、量と様態の格率を遵守していないと考えられる。また、男1と男2の持つ「身ノ上話をする」という発言の含みを理解するための前提知識が異なっていると考えられる。男2の「フツーはとぼせ」という発言から、「身ノ上話をする」ことは何か起こった人生を話すことを前提としているが、男2はフツーである人生を話すこととしていると思われる。そのため、男1と男2の間にズレが起こっており、会話がうまく行われていないように見える。

4.10. 「狩猟時代」(p.121-129)

概要：

手製の弓と矢を持った男2がベンチに座る男1に話しかけるところから始まる。男2は狩猟をしている。向こうにハイエナがいて、追い込んでくるから男1に捕まえてほしいと頼み、弓と矢を貸す。男2はハイエナの方へ向かうと、入れ違いで男3が来る。男3は男1が弓と矢を持っているのを見ると、食べるために自分の目と目の間をやれと言う。男1と男3がやるかやらないかと揉めているところに男2が戻ってくる。男2は男3が獲物だと言い、男1に殺すことを促すが、咄嗟に振り払った際に男2に矢が刺さり、毒で死んでしまう。

4.10.1. 「狩猟時代」 会話⑮

会話抜粋：

p.128

男2 (まわりこんで男1の上手に座り) 出会いがしらにやっとかないと、やりにくいんですよ。気持ちがかよったりしますからね……。

男3 (男1に) 私のことです。来た時にすぐやりませんでしたでしょう……？

男1 だって、これですか……？じゃなくてこの人ですか、あなたが追い込んでくるって言ったのは……？

男2 ほかに何もいないじゃありませんか……。

分析：

この会話について、コントの中の会話とした場合、会話の格率は遵守されているのでうまくいっているように見える。

第三者の視点から見た場合、会話の格率は遵守されていると思われる。しかし、男2男3と男1の間には大きなズレがあると考えられる。男2と男3の発言には、食べるために人間も狩猟の対象になるという前提知識が含まれているが、男1の発言では、その含まれている前提知識を持っていないことが分かる。その含みとされていることが共有されていないことで、第三者から見たときに会話同士のズレを感じると考えられる。

4.11. 「もしかして」 (p.131-137)

概要：

少年1と少女1がベンチに座るかどうかを話している。ベンチに座ろうと言うときもそれを承諾するときも、もしかして～と一度仮定してから話を進めている。ベンチが汚れているかもしれないため、お互いの座る場所を拭くことにする。座ろうすると、ホームレス風の男1が現れ、ベンチに口の中の物を吐き出して去っていく。それを見た少年1はポケットからナイフを取り出し、男1を刺し殺す。少年1と少女1は殺したことも、もしかしてと仮定の話のように話しながら去っていく。

4.11.1. 「もしかして」 会話⑯

会話抜粋：

p.134

少女1 じゃなくて、このティッシュを使うんだけど、もしいやじゃなければ、あなたの座

るところを私がふいて、私の座るところをあなたがふけばって……。何度も言うようだけでも、もしいやじゃなければよ……。

少年1 すごいよ。そうしよう……。(と、場所を入れかわって) 僕、今ね、本当に涙が出そうになって……。だって、これは、一種の愛情表現じゃない……。？いやいや、違うよ。君が僕を愛しているとか、そんなうぬぼれたことを言ってるんじゃないよ。ただ僕は、もし結婚するとしたら君のような……。でも、これは別に結婚を申し込んでいるってわけじゃなくて……。と言っても、結婚したくないわけじゃないよ。結婚するとしたら君だけでも、まだ僕は若いし……。だから……。①

少女1 あったわ……。②

少年1 何が……？

分析：

コントの中の会話とした場合、下線部①は、関係の格率と様態の格率である「曖昧な言い方をしてはならない」「簡潔な言い方をしなさい」を遵守していない。少女1の提案に対して承諾はしているが、そのあとの発言は少年1の気持ちを話しているだけで少女1の提案には関係ない。

第三者の視点から見た場合も同様に、量と関係の格率が遵守されていない。少年1が少女1に好意を抱いていることが、少年1の曖昧であり、要領を得ない発言からわかる。下線部②は、少年1の発言に対する返答にはなっておらず、発言を完全に無視している。意図的であるのか少年1の発言より優先すべきことがあって無意識に無視をしたのかは判断するのが難しいと思われる。しかし、少年1の発言に対する返答としては、ずれている返答になっている。

4.11.2.「もしかして」会話⑰

会話抜粋：

p.136-137

少年1 ねえ、もしかして僕、この人を殺してしまったのかな……。？③

少女1 もしかしたらね……。

少年1 行こうか……？

少女1 行きましょう……。

二人、下手へゆっくり

少年1 ねえ、もしかしたらって、僕、いつも考えるんだよ、もしかしたら僕は、何もして

ないんじゃないかって……。

分析：

下線部③について、コントの中の会話とした場合、会話の格率は遵守されているため、会話はうまく行われている。「もしかして」と仮定して話すことが少年1も少女1も普通としているため、格率が遵守されていると言える。

第三者の視点から見た場合、会話の格率は遵守されていると考えられる。しかし、「もしかして」と仮定して話すことを前提知識としているため、そのことを前提としていない第三者から見ると、会話がずれていると感じるため、うまく行われていないと考えられる。

4.12. 「白日夢」 (p.139-144)

概要：

旗と旗竿と椅子を持った男1が現れ、旗を立て、椅子に座る。男2が現れ、何の旗であるかと聞くと、ウシクボバンリだと言う。ウシクボバンリがどこあるのかを聞かれると、西の方にある場所で、旗を立てた足元の場所もウシクボバンリであり、旗を立てた場所は占領したと言う。そこへ巡査姿の男3が現れ、男2が男1を指すと、男3は男1を知っていて、男2に彼はキムラさんであると言う。男2は男1をどうにかしてもらおうと、勝手に旗を立てて占領していることを告げたが、男3はキムラですと言うことが流行っているから関わらない方がいいと言う。それに納得した男2は、男1を残して男3と共に去っていく。

4.12.1. 「白日夢」 会話⑱

会話抜粋：

p.143

男3　そうですよ。裏口の呼び鈴が鳴って、出ていくと男が一人立っていて、キムラですって言うんです。

男2　それはキツイなあ……。

男3　お母さんはって言うと、母もキムラですって……。

男2　お前さんがキムラであるとすれば、お母さんもキムラである可能性が大なんだから、それがその通りキムラであるとすれば、絶体絶命と言うか……。

分析：

コントの中の会話とした場合、会話の格率は遵守されているため、会話はうまく行われている。下線部の「キムラです」という発言に対して、そう言われることが「キツイ」「絶体

絶命」であるというような前提知識を男2も男3も共有しており、含みの面でもズレがないと考えられる。

第三者の視点から見た場合、量の格率を遵守していないと考えられる。「キムラです」と言うことがキツイ理由の情報がないため、男2の「それはキツイなあ……。」が返答として合っているかどうかを判断することが難しい。下線部の「キムラです」という発言に含まれる前提知識を持っていないため、情報の量が足りず、会話がうまく行われていないように感じられる。

4.13. 「ふなやー常田富士男とふなの対話ー」(p.145-173)

概要：

夕方になると公園にふなやがやってくる。ふなを連れてお爺さんで、ふなを売っているのではなく、ふなと話したい人に、ふなと話をさせてあげて、そのかわり少しお金をもらっている。夕方になり、公園にふなやがやってくる。人が通りかかるのを待つ間、ふなに話しかけている。人が通りがかり、ふなと話してみないかと声をかけるが断られる。その後も通りかかる人に声をかけるが、ふなと話したのは女の子一人だけだった。若い男がふなやになりたいと言うので、二人でふなやをすることになる。一緒にふなやをするうちに若い男もふなの声を聞けるようになり、独り立ちする。

分析：

このコトは、登場人物がふなやのお爺さんとナレーションのみである。お爺さんがふなと話している時も若い男とやり取りをしているときも、お爺さんの会話しか聞こえていない。会話のやり取りが見えないため、分析できない。

5.考察

分析対象としたコトのうち、分析できなかったコトを除くと、第三者から見た場合に見られるおもしろさに焦点を当てると、会話を三つの種類に分類することができた。その三つとは、(1) コトの中の会話とした場合においても第三者の視点から見た場合においても、会話の格率のいずれかが遵守されておらず、会話もうまく行われていない場合、(2) コトの中の会話とした場合では、格率は遵守されており、会話もうまく行われているが、第三者の視点から見た場合は、会話の含みを見ることができるところ、(3) コトの中の会話とした場合においても第三者の視点から見た場合においても、会話の格率は遵守されて

いないが、会話が成り立っている場合である。三つの分類とそれに該当する会話を整理して表1に表す。

(1)に分類できるのは、会話①, ⑧, ⑩, ⑪, ⑬, ⑯である。会話①は、関係の格率を遵守していないことによって、突拍子もない発言を含んで会話がなされ、その発言がおもしろさを引き起こしている。会話⑧は、量の格率を遵守していない。必要以上の情報があることで会話のテンポの良さが出ており、そのテンポの良さがおもしろみとなっている。会話⑩は、質の格率を遵守していないと思われるが、明確ではない。その発言が真か偽かの捉え方が第三者によると思われるため、想像を促すおもしろさがあると考えられる。会話⑪は、関係の格率を遵守しておらず、会話①と同様におもしろさが出ている。会話⑬は、質の格率が遵守されていないため、聞き手側に混乱している様子が見られ、そこにおもしろさが出ている。会話⑯は、量と関係の格率が遵守されていない。必要以上の情報を簡潔ではなくしどろもどろに発言していることで、その返答となる発言がよりおもしろく感じる可以考虑。このように(1)に分類される会話は、格率を遵守していないために会話がうまく行われていない様子をおもしろいと感じると考えられる。

(2)に分類できるのは、会話②, ③, ⑤, ⑨, ⑫, ⑭, ⑮, ⑰, ⑱である。会話②は、話し手と聞き手が理解している会話が含まれている事柄が異なっている。異なっていることで会話がうまく行われていないことが分かるため、おもしろさを感じる。会話③は、「この世の中」が含まれている事柄が聞き手、話し手と第三者で異なることで、おもしろさを感じていると考えられる。会話⑤は、巡査という立場の話し手が発言することで、会話の含みとされている事柄にズレが生じ、そのことでおもしろさを感じると考えられる。会話⑨は、会話⑤と同様の理由でおもしろさを感じると思われる。会話⑫は、話し手と聞き手の間で、会話の含みとされている事柄の理解が異なる。話し手は聞き手が理解していないことを理解しないまま発言をしていることでおもしろさを感じると考えられる。会話⑭, ⑮は、会話⑫と同様の理由でおもしろさを感じていると考えられる。会話⑰は、話し手と聞き手の間では、会話の含みとされている事柄を理解していることをお互いに分かっているが、第三者は含みとしている事柄を理解しづらく、理解できたとしても前提としていることが大きくズレているため、おもしろさを感じる。会話⑱は、会話⑰と同様の理由でおもしろさを感じると考えられる。以上のことから(2)の場合は、会話の含みを理解することによって、コントの中の世界観と第三者が存在する世界観のズレが生じ、そのことによっておもしろさを感じる。

(3) に分類できるのは会話⑥, ⑦である。会話⑥は、量の格率を遵守していないが、会話が成り立っていると判断できる。必要な情報量に満たない情報を与えているため、会話が成立しない可能性があるが、この場合は、聞き手が与えられた情報を重要視していないため、会話がうまく行われていると考えることができる。そのことから、ほとんど情報が得られないにも関わらず、普通に会話が進んでいくことにおもしろさを感じると考えられる。会話⑦は、質の格率を遵守していないが、会話がうまく行われていると判断できると考えられる。発言が十分な証拠のないことであり、会話からその発言が、偽であるのか真であるのかを判断することが難しいため、事実が曖昧なまま会話が行われている。そのことがおもしろさを感じると考えられる。この場合は、会話の聞き手が話し手の発言に対してあまり興味を持たず、重要視していないため、または発言の真偽の判断が難しいため起こったと考えられる。²²その状況において、会話がうまく行われていることがおもしろさになっている。

以上のように、(1) の場合は、会話の格率が遵守されておらず、会話もうまく行われていないことからおもしろさを感じ、(2) の場合は、会話の含みによって世界観や会話の意味が異なっているため、おもしろさを感じることができ、(3) の場合は、会話の格率が遵守されていないにも関わらず、会話が成り立っていることでおもしろさを感じ取ることができるだろう。

別役実のコント作品のおもしろさにおいて、上記(1)(2)(3)のようにディスコミュニケーションが大きな役割を果たしていることを示すことができた。第三者から見たときディスコミュニケーションに着目してコント作品をグライスの会話の理論を用いて分析すると、ディスコミュニケーションが生じて会話がうまく行われていないところ、世界観が異なっていることでおもしろさを感じることが明らかになった。

表 1

(1)	会話①, 会話⑧, 会話⑩, 会話⑪, 会話⑬, 会話⑯
(2)	会話②, 会話③, 会話⑤, 会話⑨, 会話⑫, 会話⑭, 会話⑮, 会話⑰, 会話⑱
(3)	会話⑥, 会話⑦

6.おわりに

本研究では、別役実のコント作品の会話のディスコミュニケーションに着目し、グライスの会話の理論を用いて分析を行った。コント作品から抜粋した会話は、コントの中の会話と

した場合、第三者の視点から見た場合のどちらか、またはその両方に会話の格率が遵守されていないことを軸として抜粋した。

まず、本論文に用いる上で定義を明らかにする必要のある語句について説明し、用いる際の定義づけを行った。その後、グライスの協調の原理、会話の格率、含みのそれぞれについて説明した。協調の原理とは、会話をうまく遂行する上ためには、相手の発言に対して、目的や意味を考えた上で発言をしなければならないという考えである。そのような発言を行うために遵守しなければならないものが会話の格率である。会話の格率が遵守されていなくとも会話がうまく遂行されている場合、前提知識等が共有され、含みとなっている。

分析方法や分析対象の選定理由を述べ、コントの概要、抜粋した会話、分析結果を示した。分析結果から、ディスコミュニケーションに着目した場合、コントの持つおもしろさは、三つの種類に分類できることが分かった。その分類は、(1) コントの中の会話とした場合においても第三者の視点から見た場合においても、会話の格率のいずれかが遵守されておらず、会話もうまく行われていない場合、(2) コントの中の会話とした場合では、格率は遵守されており、会話もうまく行われているが、第三者の視点から見た場合は、会話の含みを見ることができる場合、(3) コントの中の会話とした場合においても第三者の視点から見た場合においても、会話の格率は遵守されていないが、会話が成り立っている場合である。そして、それぞれにおもしろさが生じており、そこにはディスコミュニケーションが大きな役割を果たしていることが明らかになった。

参考文献

- 1 飯野克己. “序章 「土曜日の朝」と一九五〇年代オックスフォード”. 言語行為と発話解釈 コミュニケーションの哲学に向けて. 第1版, 勁草書房, 2007, p. 1-19.
- 2 池田和臣. 別役実論. 解釈と鑑賞. 1980, vol.45, no.8, p.157-161.
- 3 遠藤泉. ポール・グライスから遠く離れて:「協調の原理」で読むシェイクスピア作品の会話. KYORITSU REVIEW. 2019, vol.47, p.51-65,
https://kyoritsu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3352&item_no=1&page_id=28&block_id=27.
- 4 大久保朝憲. ディスココースにおける幸福な逸脱: 緩叙法・ボケ/ツッコミ. フランス語学研究. 2010, vol.44, no.1, p.5-21,
https://www.jstage.jst.go.jp/article/belf/44Suppl/1/44Suppl_KJ00009535982/_article/-char/ja/.
- 5 大野優花. ディスココミュニケーションの分析—オースティンの言語行為論を用いて—. 2019, p.1-23.
- 6 “コミュニケーション”. デジタル大辞泉.
<https://kotobank.jp/word/%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%8B%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3-66186>, (参照 2021-01-04).
- 7 “コント”. デジタル大辞泉.
<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%83%88/>, (参照 2021-01-04).
- 8 鈴木哲平. 詩学としてのコミュニケーション的不安: サミュエル・ベケット『メルシエとカミエ』. 仏語仏文学研究. 2010, vol.40, p.75-96.
- 9 鈴木敏夫. 別役実論序説—初期作品と演劇観. 演劇学. 1981, vol.22, p.53-68.
- 10 滝浦真人. ことば遊びは何を伝えるか?: ヤーコブソンの<詩的機能>とグライスの会話理論を媒介として. 日本語科学. 2002, vol.11, p.79-99,
https://repository.ninjal.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2094&item_no=1&page_id=13&block_id=2.
- 11 “ディスコミュニケーション”. デジタル大辞泉.
<https://kotobank.jp/word/%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%B9%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%8B%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3-1371441>, (参照 2021-01-04).
- 12 福田一雄. 対人関係の言語学: ポライトネスからの眺め. 第1版, 開拓社, 2013, 211p.

- 13 別役実. 別役実の混沌・コント. 第1版, 三一書房, 2017, 287p.
- 14 “別役実”. デジタル大辞泉.
<https://kotobank.jp/word/%E5%88%A5%E5%BD%B9%E5%AE%9F-171049>, (参照 2021-01-04).
- 15 別役実. 別役実のコント指南(新連載・第1回)コントを学ぶ. 悲劇喜劇. 2008, vol.61, no.12, p.52-54.
- 16 別役実. 別役実のコント指南(第2回)コントを学ぶ(その2). 悲劇喜劇. 2009, vol.62, no.2, p.55-57.
- 17 別役実. 別役実のコント指南(第3回)コントを学ぶ(その3). 悲劇喜劇. 2009, vol.62, no.3, p.47-49.
- 18 別役実. 別役実のコント指南(第4回)コントを学ぶ(その4). 悲劇喜劇. 2009, vol.62, no.4, p.59-61.
- 19 別役実. 別役実のコント指南(第5回)コントを学ぶ(その5). 悲劇喜劇. 2009, vol.62, no.5, p.33-35.
- 20 別役実. 別役実のコント指南(第6回)コントを学ぶ(その6). 悲劇喜劇. 2009, vol.62 no.6, p.62-64.
- 21 別役実. 別役実のコント指南(第7回)コントを学ぶ(その7). 悲劇喜劇. 2009, vol.62, no.7, p.68-70.
- 22 別役実. 別役実のコント指南(第8回)コントを学ぶ(その8). 悲劇喜劇. 2009, vol.62, no.8, p.61-63.
- 23 別役実. 別役実のコント指南(第9回)コントを学ぶ(その9). 悲劇喜劇. 2009, vol.62, no.9, p.44-46.
- 24 別役実. 別役実のコント指南(第10回)コントを学ぶ(その10). 悲劇喜劇. 2009, vol.62, no.11, p.61-63.
- 25 別役実. 別役実のコント指南(第11回)コントを学ぶ(その11). 悲劇喜劇. 2009, vol.62, no.12, p.90-92.
- 26 別役実. 別役実のコント指南(第12回)コントを学ぶ(その12). 悲劇喜劇. 2010, vol.63, no.1, p.48-50.
- 27 別役実. 別役実のコント指南(第13回)コントを学ぶ(その13). 悲劇喜劇. 2010, vol.63, no.2, p.47-49.
- 28 別役実. 別役実のコント指南(第14回)コントを学ぶ(その14). 悲劇喜劇. 2010, vol.63, no.3, p.67-69.
- 29 別役実. 別役実のコント指南(第15回)コントを学ぶ(その15). 悲劇喜劇. 2010, vol.63, no.4, p.77-79.
- 30 別役実. 別役実のコント指南(第16回)コントを学ぶ(その16). 悲劇喜劇. 2010, vol.63, no.5, p.57-59.
- 31 別役実. 別役実のコント指南(第17回)コントを学ぶ(その17). 悲劇喜劇. 2010, vol.63, no.8, p.65-67.
- 32 別役実. 別役実のコント指南(第18回)コントを学ぶ(その18). 悲劇喜劇. 2010, vol.63, no.9, p.39-41.
- 33 別役実. 別役実のコント指南(第19回)コントを学ぶ(その19). 悲劇喜劇. 2010, vol.63, no.11, p.70-72.

- 34 別役実. 別役実のコント指南(第 20 回)コントを学ぶ (その 20) . 悲劇喜劇. 2010, vol.63, no.12, p.44-46.
- 35 別役実. 別役実のコント指南(第 21 回)コントを学ぶ (その 21) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.1, p.41-43.
- 36 別役実. 別役実のコント指南(第 22 回)コントを学ぶ (その 22) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.2, p.52-54.
- 37 別役実. 別役実のコント指南(第 23 回)コントを学ぶ (その 23) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.3, p.68-70.
- 38 別役実. 別役実のコント指南(第 24 回)コントを学ぶ (その 24) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.4, p.63-65.
- 39 別役実. 別役実のコント指南(第 25 回)コントを学ぶ (その 25) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.5, p.54-56.
- 40 別役実. 別役実のコント指南(第 26 回)コントを学ぶ (その 26) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.6, p.57-59.
- 41 別役実. 別役実のコント指南(第 27 回)コントを学ぶ (その 27) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.7, p.31-33.
- 42 別役実. 別役実のコント指南(第 28 回)コントを学ぶ (その 28) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.8, p.31-33.
- 43 別役実. 別役実のコント指南(第 29 回)コントを学ぶ (その 29) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.9, p.58-60.
- 44 別役実. 別役実のコント指南(第 30 回)コントを学ぶ (その 30) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.10, p.73-75.
- 45 別役実. 別役実のコント指南(第 31 回)コントを学ぶ (その 31) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.11, p.29-31.
- 46 別役実. 別役実のコント指南(第 32 回)コントを学ぶ (その 32) . 悲劇喜劇. 2011, vol.64, no.12, p.43-45.
- 47 別役実. 別役実のコント指南(第 33 回)コントを学ぶ (その 33) . 悲劇喜劇. 2012, vol.65, no.1, p.37-39.
- 48 別役実. 別役実のコント指南(第 34 回)コントを学ぶ (その 34) . 悲劇喜劇. 2012, vol.65, no.3, p.63-65.
- 49 別役実. 別役実のコント指南(第 35 回)コントを学ぶ (その 35) . 悲劇喜劇. 2012, vol.65, no.4, p.45-47.
- 50 別役実. 別役実のコント指南(最終回)コントを学ぶ (その 36) . 悲劇喜劇. 2012, vol.65, no.6, p.115-117.
- 51 P.グライス. 清塚邦彦訳. 論理と会話. 第 1 版, 勁草書房, 1998, 384p.

注

- 1 デジタル大辞泉. 別役実.
<https://kotobank.jp/word/%E5%88%A5%E5%BD%B9%E5%AE%9F-171049>, (参照 2021-01-04).
- 2 大野優花. ディスコミュニケーションの分析—オースティンの言語行為論を用いて—. 2019, p.1-23.の分析結果を参照した。
- 3 デジタル大辞泉. コミュニケーション.
<https://kotobank.jp/word/%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%8B%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3-66186>, (参照 2021-01-04).
- 4 デジタル大辞泉. ディスコミュニケーション.
<https://kotobank.jp/word/%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%B9%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%8B%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%B3-1371441>, (参照 2021-01-04).
- 5 デジタル大辞泉. コント.
<https://dictionary.goo.ne.jp/word/%E3%82%B3%E3%83%B3%E3%83%88/>, (参照 2021-01-04).
- 6 池田和臣. 別役実論. 解釈と鑑賞. 1980, vol.45, no.8, p.157-161.
- 7 大久保朝憲. ディスココースにおける幸福な逸脱 : 緩叙法・ボケ/ツッコミ. フランス語学研究. 2010, vol.44, no.1, p.5-21.
- 8 上山輝, 山田奈都美. コントと笑いの関係についての考察—ラーメンズのコントを題材として—. 人間発達科学部紀要. 2009, vol.3, no.2, p.177-187.
- 9 滝浦真人. ことば遊びは何を伝えるか? : ヤーコブソンの<詩的機能>とグライスの会話理論を媒介として. 日本語科学. 2002, vol.11, p.79-99.
- 10 遠藤泉. ポール・グライスから遠く離れて: 「協調の原理」で読むシェイクスピア作品の会話. KYORITSU REVIEW. 2019, vol.47, p.51-65.
- 11 飯野克己. “序章 「土曜日の朝」と一九五〇年代オックスフォード”. 言語行為と発話解釈 コミュニケーションの哲学に向けて. 第1版, 勁草書房, 2007, p. 1-19.
- 12 ポール・グライス. 清塚邦彦訳. “解説 グライス紹介”. 論理と会話. 第1版, 勁草書房, 1998, p. 349-365.
- 13 ポール・グライス. 清塚邦彦訳. 論理と会話. 第1版, 勁草書房, 1998, 384p の第二章, 第三章を中心にまとめた。
- 14 『論理と会話』. p.37.
- 15 『論理と会話』. p.38.
- 16 『論理と会話』. p.39.
- 17 『論理と会話』. p.34-59.
- 18 『論理と会話』. p.44.

-
- 19 『論理と会話』. p.46.ここ取り上げている具体的な会話の例は、そのまま引用している。
- 20 別役実. 別役実のコント指南(新連載・第1回)コントを学ぶ. 悲劇喜劇. 2008, vol.61, no.12, p.52-54.を参考にまとめた。
- 21 別役実. 別役実の混沌・コント. 第1版, 三一書房, 2017, 287p.のコントの概要は自分でまとめ、会話はそのまま抜粋した。
- 22 この場合に会話の理論がどのように当てはまるかに関しては本論文では論じないこととする。